

(資料)

## REFRANERO ESPAÑOL (37) スペインの諺辞典

Bernardo Villasanz\*(ed.)

新 井 藍 子\*\*

### 1365. Por su mal y su ruina nacen alas a las hormigas.

不運と破滅のために 蟻に羽が生える

- せっかく手に入れて得をしたと思われたものが、かえって人に損を与えることをたとえていう。同義で異表現の次の諺 “Nacen alas a la hormiga para que se pierda más aína. すばやく消えさせるように、蟻に羽が生える” が、筆者の諺辞典、諺 1016 に、例題とともに詳しく説明されているので参照して下さい。

### 1366. Por todas partes se va a Roma.

すべての道は ローマに通ず

- 目標に達するためには、いくつもの方法がある。“岩波ことわざ辞典”によると、真理は一つだけだというたとえで、手段、方法は異なっても同じ目的とするところに至るとのこと。
- “Todos los caminos van a Roma. 同訳” とも言う。“岩波ことわざ辞典”の説明によると、中世ラテン語以来の古いことわざで、古代ローマ帝国の全盛期には世界各地からローマへ道路が通じていたことによるとする。その意味では、厳密には異表現の

\* Edición y revisión. Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

\*\* Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

“Todos los caminos—すべての道”のほうが，“Por todas partes—あらゆる場所を”より、日本語の翻訳に近い。

**1367. Por tu corazón juzgarás el ajeno, en malo y bueno.**

己をもって 人をはかる

- この諺は、いかに人というものは、他者をそれぞれの異なった見解と主観で判断しているかをおしえてくれる。そして人は、自分の判断こそが本当であると思っている、その間違いにも気がつかないのである。(パロス)
- 真実をついている諺である。この世で争いが絶えないのも、自分こそは正しいと思っている人間があまたいるからである。類義のことわざには、“Con la vara que midas te medirán. 人をおしはかるものさしで、人からもおしはかられる”(筆者の諺辞典、諺 283 を参照)がある。これなども、人を軽々しく判断したり、批判したりすると、同じようにあなたもされますよと警告している諺である。これらのおしえに関しては、すでにイエスが次のようにわれわれに述べられている；“No juzguen a otros, y Dios no los juzgará a ustedes. 人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。No condenen a otros, y Dios no los condenará a ustedes. 人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。Perdonen, y Dios los perdonará. 赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。(ルカによる福音書 6-37-38) Dios los medirá a ustedes con la misma medida con que ustedes midan a los otros. あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。(同福音書 6-38-39) 真理をついたこれらの御言葉を実行するのはなんと難しいことであろうか。何故ならば、われわれは皆 “...te pones a mirar la paja que tiene tu hermano en el ojo, y no te fijas en el tronco que tienes en el tuyo. ...あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、...自分の目の中の丸太に気づかない”(ルカによる福音書 6-41-42) からであるとイエスは仰られる。また、“Dicen que eres bueno, mete la mano en tu seno. あなたはいい人だと言われているが、本当か胸に手をあてて考えよ”(同諺辞典、諺 412 を参照) という諺も、世間での評判などというものは、当てにならないものであるとおしえてくれる。身近にいてその正体を知りつくしている身内の評価と、世間のそれとの落差があまりにも大きいということがしばしばあるものである。

- 標題の諺と同義の日本の諺には“己をもって人をはかる”がある。人というものは、自分を中心において、そこから他者の力や心、善悪をおしはかるものであるという意。

**1368. Por turbia que esté no digas de este agua no beberé.**

どんなに濁っていても この水は飲まないと言うな

- 人の長い人生には、予想もつかないような事が多々起こるのが常であるから、一時的な感情にとらわれた断定的な言動で、後で窮地に追いこまれるような事態は避けるべきであるとおしている。
- 次の異表現“Nadie diga de este agua no beberé. 誰もこういう水は飲まないと言うな”が、筆者の諺辞典、諺 1021 で詳しく用例とともに説明されているので参照して下さい。また、他の異表現には“*No diga el caminante de este agua no beberé.* 旅人よ、この水は飲まないと言いなさんな”(筆者の諺辞典、諺 963 を参照)がある。状況的には、確かなことは何ひとつない旅をしていれば尚更である。いつの水飲み場に着けるか分からないのだから、飲める所で飲んでおいた方がいい、たとえ少々濁っていてもという意。人生も旅と同じなのだから、謙虚に人生という道を歩いていくべきで、断定的な妥協のない言動はとるべきではないとおしている。標題の諺に類似しているのが、日本語の“清濁併せのむ”という表現である。これは、善も悪も分けへだてなく受け入れる、度量の広いことをたとえている。

**1369. Por una parte unta y por otra punza.**

ある箇所には 軟膏を塗り 別の箇所には 穴をあける

- (表面では) いい顔を見せるが、(裏では) 平気で裏切り行為をするような偽善者をいう。表と裏のある二面性を持った人をたとえていう。
- 同義の諺には；“*El gato de Marirramos halaga con la cola y araña con las manos.* しっぽでじゃれつき、爪でひっかくマリラモスの猫”(筆者の諺辞典、諺 613 を参照)、“*Palabras de santo y uñas de gato.* 聖人の言葉に、猫の爪”(同諺辞典、諺 1245 を参照)、“*Palabras dulces y melosas, a las veces traen ruines obras.* 甘く優しい言葉、卑しい行い”(同諺辞典、諺 1245 を参照)、“*Piel de oveja, carne de lobo.* 羊の皮の下には、狼の肉”(同辞典、諺 1317 を参照)などがある。
- 日本にも同義で、同じような言い回しを使った諺が次のようにある；“口に甘きは腹

に毒あり”，“口に蜜あり腹に剣あり”など。

**1370. Por una oreja entra y por otra sale.**

一方の耳から 片方の耳

- “右の耳から左の耳”（日本のことわざ）に抜けていくように、意見や忠告などをいくら聞かされても、聞き流すだけで全然気に留めない人をいう。（パロス）
- 同義のことわざには“Es como quien oye llover. 雨垂れを聞いている人と同じような”，“Castígame mi madre, y yo trompójelas. 母にはごごと言わせとけ，わたし馬耳東風”（筆者の諺辞典，諺 225 を参照），“Da voces al lobo, responderte ha el eco. 狼に叫んでも，返ってくるのはこだまだけ”（同諺辞典，諺 379 を参照），“Predicar en desierto, sermón perdido. 砂漠で説教するのは，無駄な説法”（同諺辞典，諺 1374 を参照）などがある。コレアス諺集には，次の異表現“Por un oído le entra y por otro le sale. 一方の耳から，片方の耳”（他者が言うことを尊重しない人をいう—コレアス）がある。
- 日本には，同義で，動物をたとえに使った次のようなことわざが多数ある；“馬の耳に念仏”，“犬に論語”，“馬耳東風”，“蛙の面に水”，“牛に経文”など。

**1371. Por un clavo se pierde una herradura; por una herradura, un caballo; por un caballo, un caballero; por un caballero, un campo; por un campo, un reino.**

一本の釘から一個の蹄鉄が消え，一個の蹄鉄から一頭の馬が消え，一頭の馬から一人の騎兵が消え，一人の騎兵から一つの戦場が消え，一つの戦場から一国が消える

- 些細な事柄がどんなに重大な結果をもたらすかを皮肉に言い表したことわざである。（パロス）些細と思われる油断が，大事を引き起こし，甚大な被害を与えるというたとえ。（イリバレン）
- “格言の由来”（イリバレン）には，“Por un clavo se pierde una herradura. 一本の釘から一個の蹄鉄が消える”が収載されている。そして，格言の全文として“Por un clavo se pierde una herradura, por una herradura, el caballo, y por un caballo, un caballero. 一本の釘から一個の蹄鉄が消え，一個の蹄鉄から一頭の馬が

消え、一頭の馬から一人の騎兵が消える”を載せている。勿論、コレアス諺集に収載されている標題の格言も引用している。さて、或る格言の解説者を引用してイリバレンは、次のように格言の由来を述べている；“一本の釘がなくなれば、蹄鉄が外れ、蹄鉄がなければ、馬は歩けなくなり、馬を失う羽目になる。馬がなければ、騎兵もいなくなってしまう。何故なら、敵が容易く追いつき、騎兵を殺してしまうから。これら一連のことが起こったのも、単に馬の蹄鉄に打ちつけてある一本の釘に注意を払わなかったためである。”また、イリバレンは、別の解説者を引用して、この格言は、歴史上実際に起こった事件に拠るものであると言う；“この格言は、1302年、フランドル地方を占拠していたフランスのフェリペ、美男王の時代にまでさかのぼる。当時、フランドル地方の西方を治めていた総督がとても横暴であったので、それに対抗してその地の住民が蜂起した。それが戦争にまで発展し、結局、フランスは負けてしまった。住民が蜂起した時、この総督が味方である東方の総督にある重大な密書を送ったのであるが、その密書が敵の手に渡ってしまった。というのも、使者が乗っていた馬の蹄鉄の一本の釘がなくなったことにより、蹄鉄がなくなり、そのことにより、使者は馬から落とされてしまい、密書までなくなってしまった。格言は、この一本の釘がなくなったことが原因で、フランス王が、いくつかの彼の王国の一つを失う羽目に陥ってしまったという出来事から来ていると推察できる。”

- コレアス諺集には、次の異表現がある；“Por un clavo se pierde un caballo; por un caballo, un caballero; por un caballero, un ejército. 一本の釘から一個の蹄鉄が消え、一頭の馬から一人の騎兵が消え、一人の騎兵から一軍団が消える”，また、同義では、“Por una vieja que murió, todo el año pestilencia. 老婆が死んだら、その年は疫病が流行”（些細な原因によってもたらされた悪影響が長期間続くことのため）とえーバロス諺集），“Por un malo perece la nao. 一人の悪人によって、大型の舟が消え去る”（コレアス諺集），“Por un ladrón pierden ciento en mesón. 一人の泥棒によって、居酒屋にいる百人が（金品を）なくす”（同諺集）などの諺がある。
- 出自が“韓非子”の“蟻の穴から堤も崩れる”が、上記の一連のことわざとぴったり同じ意味の諺である。“故事ことわざ活用辞典”によると、“蟻があけた小さな穴がもとで、堅固な堤も崩れることがあるように、わずかな油断や手違いが、取り返しのつかない大事を引き起こすとえ”また、次のような一連の異表現がある；“千丈の堤も蟻の一穴から”，“千里の堤も蟻の穴から”，“蟻の一穴天下の破れ”など。

**1372. Por un garbanzo no se descompone la olla.**

一粒のガルバンソで ナベ料理は 台無しにはならぬ

- スバルビィ (諺辞典) によると、一人ぐらい足りなくても (欠席者がいても)、会合がお流れになるようなことはない。標題とは異表現の “Por un garbanzo no se descompone el puchero, o una olla. 一粒のガルバンソで、煮込み料理 (豆などの)、或は、ナベ料理は、台無しにはならぬ” が、ここには、収載されている。また、パロスによると、人が、社会通念とは異なった見解を持っているような時に用いられる表現である。

**1373. Por viejo que sea el barco, pasa una vez el vado.**

どんなに舟が古くても 一回ぐらいは 浅瀬を 渡れるであろう

- スバルビィ (諺辞典) によると、たとえ役立たずで、ごくつぶしであろうと、どんな者でも何かの場合には、役に立つこともあろうという意の比喻。この辞典には、異表現 “Por viejo que sea el barco, pasa una vez el vado, o el charco. どんなに舟が古くても、一回ぐらいは、浅瀬を、或は、水たまりを渡れるであろう” が、収載されている。また、パロスによると、ある事を人に急がせる時に用いられる表現。
- コバルビアスの “宝典” には、“vado—浅瀬” を用いた次の言い回し “No estar al vado ni a la puente. 人がある事を実行するに際して、それに手をつけられずにとまどっていること” が収載されている。これとは別にこういう熟語もある。“al vado, o al puente. 二つに一つ”

**1374. Predicar en desierto, sermón perdido.**

砂漠で説教するのは 無駄な説法

- 本人にとってよかれと思って忠告したのに、分かってもらえずその説得が無駄に終わってしまうことをたとえて言う。(パロス)
- イリバレン (格言の由来) は、ロドリゲス・マリンを引用し、格言的なこの言い回しは、ポピュラーな次の小歌の中に見いだされると述べている；

Quitarme de que te quiera 君を愛することを僕に断念させるのは

es predicar en desierto, 砂漠で説教し  
 machacar en hierro frío 冷えた鉄を打ち  
 y darle voces a un muerto. 死体に向かって怒鳴るようなもの

- コバルビアス (宝典) によると, “Predicar en desierto” とは, “人が説得したり, 教えている時に, 聞き手が聞こうとしない状態を指す”
- 標題の格言と類似の熟語には “dar voces al viento / dar voces en el desierto—無駄骨を折る” がある。また, 旧約聖書のシラ書には, “愚か者に説明するのは, うたた寝をしている人に話すようなもの” (22-10) という比喩が見られる。
- 同義の諺には, “Castígame mi madre, y yo trompójelas. 母にはごこと言わせとけ, わたし馬耳東風” (筆者の諺辞典, 諺 225 を参照), “Da voces al lobo, responderte ha el eco. 狼に叫んでも, 返ってくるのはこだまだけ (馬の耳に念仏)” (同諺辞典, 諺 379 を参照), “Por una oreja entra y por otra sale. 一方の耳から片方の耳 (右の耳から左の耳)” (同諺辞典, 諺 1370 を参照) などがある。
- 例題 1 : ドン・キホーテ第二部 6 章, ドン・キホーテの姪と家政婦が, ドン・キホーテの三度目の家出を止めさせようとあらゆる手だてを用いたが, “...todo era predicar en desierto y majar en hierro frío. すべてが砂漠で説教すること, または冷えた鉄を打つことに終わった。” (続編一, 永田寛定訳) 注: majar—machacar, 打つ (Martín de Riquer)
- 例題 2 : ドン・キホーテ第二部 29 章, 舟に勝手にのりこみ, 川の真中まで来て, 水車にぶつかりそうになったドン・キホーテとサンチョは, 粉ひきたちに助けられるが, 舟はこわれてしまった。舟の持ち主の漁師までがかけつけ, ドン・キホーテに補償を要求する。ドン・キホーテのたわごと相手にもされず, ドン・キホーテは, 心の中でこう叫ぶ, “Aquí será predicar en desierto querer reducir a esta canalla a que por ruegos haga virtud alguna. 今この悪党どもにおだやかに言って善事をおこなわせようとするのは, 砂漠で説教するに等しかろう。” (続編二, 永田寛定訳) 注: reducir—convencer, 説得する (Martín de Riquer)
- 例題 3 : ドン・キホーテ第二部 67 章, いつものごとし, サンチョは, ドン・キホーテと会話をしながら, いくつもの諺を織り交ぜる。それに耐えかねたドン・キホーテが, “... y muchas veces te he aconsejado que no seas tan pródigo de refranes y ...

...pero paréceme que es predicar en desierto, ..... なんども, なんども教えたように, あんまり諺をむだ使いするでない, .....いや, これも, 砂漠で説法, 馬の耳に風, ...” (続編三, 高橋正武訳)

- 同義の日本の諺も多数ある; “馬の耳に念仏”, “犬に論語”, “馬の耳に風”, “馬耳東風”, “右の耳から左の耳” など, これらは, その中でもよく知られている諺である。

### 1375. Pregonar vino y vender vinagre.

ワインを呼び売りして 酢を売る

- “羊頭を懸げて狗肉を売る”と同義の諺で, よい見本を見せたり, 巧みな宣伝文句でものを売りつけたりするが, 実際の商品はそうではないことのとえ。また, コレアス(諺集)によると, 口先ばかり達者で, 能力や腕がそれに伴わない人, 言うことと行うことが大きく違う人をたとえていう。コレアス諺集には, 標題の諺と共に, 次の異表現 “A pregonar vino y vender vinagre. 同訳” (筆者の諺辞典, 諺 80 を参照)が見られる。
- “故事ことわざ活用辞典”によれば, “羊頭を懸げて狗肉を売る”の“狗肉”とは, “犬の肉”のことで, 店頭には羊の肉をつるしておいて, 羊の肉を売っているように見せかけて, 実際には下等な犬の肉を売りつける意味で, 見せかけだけは立派にして, 実質が伴わないことをたとえている。まさに, スペインの諺も同じで, 比喩に上等なワインと下等な酢を用いて, 人の見かけや吹聴が中身と違うことをたとえている。同義の“看板に偽りあり”という日本の諺が, 短い語句でずばりと上記の諺の意味を表わしている。

### 1376. Preguntando se va a Roma.

尋ねながら ローマに着く

- 質問すれば, あらゆることの知識を身に付けることができるようになるというたとえ。(パロス)
- 異表現には, まず, “宝典(コバルビアス)”に “Quien lengua ha, a Roma va. 舌があれば, ローマに着く”が, コレアス諺集には “Preguntando van a Roma. 尋ねながら, ローマに着く”が, それぞれある。
- 知らないことは, 恥ずかしがらずに素直に人に聞けば知りたいことの知識を得て, 目



的を達成することができるのとたえている諺である。目標の象徴として使われているローマという都市は、他の都市では見つけられない成功を見つけれられるという究極の目的地であった。すでに見てきた“Por todas partes se va a Roma./Todos los caminos van a Roma. すべての道は、ローマに通ず”（筆者の諺辞典、諺 1366 を参照）の諺にも通ずるものがある。古代ローマの全盛期には、世界各地からローマへ道路が通じていて、あらゆる人々が、その当時大都市であった、ローマへ来た。その道中では、おそらく各国の旅人たちがローマへの道を尋ねながら、憧れのローマを目指し、苦労を重ねながら、ついにローマに着いたのであろう。そのことが標題のことわざから、容易に推察される。また、“Camino de Roma, ni mula coja ni bolsa floja. ローマへの旅は、びっこのラバも、空っぽの財布も、持っていくな”（同諺辞典、諺 209 を参照）という諺からも、当時のローマへの旅がどんなに難儀であったかが分かる。同様に、これから何かを企てようとする時、予想される危険、困難などに臆せず、にやろうという決意を表わす意の諺にも次のようにローマという比喩が用いられている、“A Roma por todo. 万難を排して”（同諺辞典、諺 95 を参照）それほど、ローマへ旅をすることは、大変で一大決心が必要であった。人々が、憧れ、立身出世を求めてやってくるローマという都市が成り立つまでには、長い時間がかかったという次の諺もある、“No se ganó Zamora en una hora, ni Roma se fundó luego toda. サモーラは、一時間で落城せず、ローマは、一日にしてならず”（同諺辞典、諺 1172 を参照）、その他にも、ローマの名がでてくる諺には次のようなものがあるが、象徴であるローマを比喩として用いていることは明白である；“Bien se está San Pedro en Roma. 聖ペトロは、ローマに居れば安全”（ローマに居続けることを、つまり今の状態に留まっていることを勧めている一筆者、同諺辞典、諺 139 を参照）、“Cuando a Roma fueres, haz como vieres. 郷に入っては、郷に従え”（ローマに入ったら、そこで見ることを行いなさいと、初めは、ローマに旅する人々に、そこで名声を得るための心構えとして言われた諺であろうが、後には、どんな所でも、よその土地に行ったらその土地の習慣に従うがよいとなったのであろう一筆者、同諺辞典、諺 327 を参照）など。

- 一 標題の、知識を身に付けるためには、知らないことは人に聞きなさいという意味のことわざには“問うは一旦の恥問わぬは末代の恥”、“聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥”などがある。

**1377. Primera (La) mujer escoba y la segunda señora.**

最初の妻は掃除し 二番目の妻は奥様

- 最初の妻に死なれたやもめの亭主は、二番目の夫人を奥様扱いにするのが普通である。(バロス) 二度結婚する男は、一番目の夫人より二番目の夫人に対するほうが丁重である。(スバルビィ)
- コレアス(諺集)の解説は次のようにより詳しい；“<mujer-妻, 夫人>という言葉を用いずにこう言う<La primera escoba y la segunda señora. 最初のは, 掃除し, 二番目のは, 奥様>と。二回目の結婚の時に, こういうことが起こるのは, 男性のほうが, 前回の経験により, より慎重になっていること, イニシアチブを取れるということ, 新しい妻に対する愛情があることなどである。その妻が若ければ, なお扱いがよくなる。”
- 類義の諺には“La primera mujer es matrimonio; la segunda, compañía; la tercera, bellaquería. 最初の妻とは, 夫婦, 二番目のは, 仲間, 三番目のは, お遊び”(何回も結婚する男性を非難している—バロス) また, スバルビィ諺辞典には, 異表現で“La primera mujer es matrimonio; segunda, compañía, la tercera, herejía. 最初の妻とは, 夫婦, 二番目のは, 仲間, 三番目のは, 好色”(いわゆるカトリックで言われている姦淫の罪を度々犯す者を咎めている—スバルビィ)
- こちらでは, 後妻に行くときは, “去り跡へ行くとも死に跡へ行くな”と言われていた。これは, 先妻と離婚した男のところに行くのはよいが, 死別したあとへはいくならないという意味である。また, 標題のことわざの類義には, “女房と畳は新しい方がよい”, “女房と茄子は若い方がよい”などがある。きちんと家を掃除し, 家計のやりくりも上手で, 家をうまく治められる妻, つまりスペインの諺にでてくる最初の妻を求めらるなら, “女房は台所から貰え”とか“女房は庭から取れ”などと, 日本のことわざはおしえている。

**1378. Primero pan y después can.**

最初はパンを 後で犬を

- 最初に必要なものを、その他のものは後で（購入しなさい）。（バロス）最初に用意し、使うのは農場のために、その後で、その時、その時に生じる経費に使え。（コレアス 諺集）
- 同義の諺には“Primero es la camisa que el sayo. 最初はシャツを、後で上っ張りを（買え）”（最初に必需品に使え、後で嗜好品に一バロス）、また、類義の諺には“Primero la sardina que la gallina; que si es primero la sardina, será después la gallina. 最初はイワシを、後でチキン（を買え）”（家の準備をするのには、最初は少しずつ初めて、徐々にいっぱいになるようにするのがいい—コレアス）がある。
- ものを買う時は、まず必要なものから、少しずつ買って、徐々に増やしていくのが慎重なやり方であると説いている。その意味では、“取り勘定より遣い勘定”、“入るを量りて出ずるを為す”などの諺がおしえているように無駄な支出を抑えることに気をつけなくてはならない。

**1379. Procura lo mejor, espera lo peor y toma lo que te viniera.**

最善の努力を尽くせ 最悪を待ち受けよ そして 来たものを  
受け入れよ

- 何事にも力の限りの努力を尽くし、それでもなお楽観はせず、現実を冷静に受けとめよとおしえている。必ずしも、努力が報われるとは限らないのがこの世であるから、最悪の事態まで予想して心構えをせよとおしえている極めて現実的な処世訓である。
- 類義の諺には“A Dios rogando y con el mazo dando. 槌をふるいながら神に祈れ（天は自ら助くる者を助く）”（力を尽くして努力をすれば、神にも助けてもらえるだろう、何にもしないでお祈りだけしていても駄目であるという意。筆者の諺辞典、諺 15 を参照），“A quien Dios se la diere, San Pedro se la bendiga. 神が与える者を、聖ペテロも祝福す”（己の求めるものが、成就しようと、しなかりようと、神の意志に任せよ—同諺辞典、諺 85 を参照）などがある。
- こちらにも類義の諺でよく知られているのがある；“人事を尽くして天命を待つ”（人としてやれるだけの努力を最大限にした上は、その結果はただ天の大きな力に任

せ、結果がどう出ても悔いはないという心境、出自は初学知要)

**1380. Puerta (La) y la bolsa abierta para hacer casa cierta.**

開いた戸と 開いた財布で 安住の家

- 本当の名声と家のよい評判を得るためには、全ての人に対して温かい歓待をしなければならぬ。(バロス)
- 標題の諺と共に、次の異表現がコレアス諺集に収載されている；“La bolsa y la puerta abierta para hacer casa cierta. 開いた財布と、開いた戸で安心な家”（その家に何かを求めてやって来る人たちが、歓迎され、与えられれば、いつでもそこに駆けつけて来るであろう。また、その家のどこかに住みたいとやって来る人に対して、鷹揚に応じてくれるだろう—コレアス）
- 標題の諺は、人が終の住処として選んだ家に安心して住むためには、隣近所には気前よく、家は開放的にしていつでも遊びにこられるようにするがよいとおしえている。
- 同義の諺には“La boca y la bolsa abierta para hacer cosa cierta. ほめ言葉と開いた財布で思うがまま”（親切な言葉と気前のよさで、人は欲するものを手に入れることができる—一筆者の諺辞典、諺 147 を参照）がある。次の反対の諺が“宝典”（コバルピアス）に見られる；“A puerta cerrada el diablo se torna. 閉まっている戸の前で、悪魔が帰る”

**1381. Pues tenemos hogazas, no busquemos tortas.**

大きいパンがあるんだから トルタを探すのはよそう

- 持っている必需品に満足し、余計なぜいたく品を欲しがるとおしえている。(スバルビ)
- 異表現には“Si te dieran hogaza, no pidas torta. パンをくれるなら、トルタはねだるな”がある。比喩に使われている“hogaza—パン”は、コバルピアス（宝典）によると、ふすまのパン、或は、粉を荒くふるいにかけたパンで、羊飼いと作家が食べる大きなパン、家でつくるいわゆる手作りのパンのことである。また、“torta—トルタ、種なしパン”とは、ふくらし粉でふくらませない平べったい丸いパンで、旧約聖書の中では、ユダヤ人が食べている。次の諺の“A falta de pan, buenas son tortas. パンがなければ、トルタ（種なしパン）で結構”（筆者の諺辞典、諺 21 を参

照、普通のパンがなければ、種なしのパンで間に合わせて我慢しようという意) が言うように、あくまでもパンがない時の代用品である。しかし、“hogaza”と比べれば、このトルタのほうがまだ上等なのである。標題のことわざでは、hogazas があるんだから、わざわざ torta を探すのは止めよう、持っているもので我慢しようと言っている。

- 例題：ドン・キホーテ第二部 13 章、森の従士が、サンチョに、冒険をさがして歩くのはやめようではないか、“...y pues tenemos hogazas, no busquemos tortas, y volvámonos a nuestras chozas;... わしたちは、でかいパンを持っているんだから、トルタを探さないことにするんでさ。さあ、おたがいの小屋へ帰りやしょう。” (続編一、永田寛定訳)

## Q

### 1382. Que a la corta, que a la larga, todo se paga.

遅かれ早かれ 全ては清算される

- いつかは、われわれがしてきたあらゆる悪事が清算される。(コレアス諺集) 悪行をしてきた人にとってそういつまでもバラ色の日々が続くわけがないという意。
- 同義の諺には；“A cada puerco le llega <o viene> su San Martín. どの豚にも、サン・マルティンの祭日がやって来る” (一年間主人から餌だけ与えられてものぐさに過ごした豚に、屠殺の時期がやって来るという意、筆者の諺辞典、諺 8 を参照)，“A la corta o la larga, el tiempo todo lo alcanza. 遅かれ早かれ、時が全てを明らかにする” (同諺辞典、諺 28 を参照)，“No hay río bravo que no tenga vado, ni plazo que no llegue a cabo. どんなに流れが早い川にも浅瀬がある、どんなローンにも期限がある” (誰にでも自分が犯した罪や、間違いを償う日が必ずやって来るものである、同諺辞典、諺 1146 を参照)，“No hay plazo que no se cumpla, ni deuda que no se pague. 満期にならないローンはないし、支払われない借金もない”，“No hay plazo tan lueño que no le tema el que debe. 借金している者が懸念しないほど遅い期日のローンはない” など、いずれもいつかはばちが当たるなどとは、夢にも

思ったことがない人を当てこすっている。

- 同義の日本の諺では、“仇も情けも我が身より出る”，“爾に出ずるものは爾に返る”，“因果応報”，“身から出た錆”など、まだまだ多数あるが，“故事ことわざ活用辞典”によれば、人間の行いの善悪に応じて、それ相応の報いがあるが、悪事には悪の報いがあるという、悪いほうの意味にいうことが多いそうである。

### 1383. ¿Qué aprovecha el candil sin mecha?

芯のないろうそくは 何の役に立つの？

- 十分な準備もしないで物事を行っても、成功するものではないとおしえている。
- コレアス諺集には、次の異表現が見られる；“Candil sin mecha, ¿qué aprovecha? 芯のないろうそくよ、何の役に立つの？”，“¿De qué aprovecha candil sin mecha? 同訳”，“El candil sin mecha, ¿qué aprovecha? Poco aprovecha. 芯のないろうそく、何の役に立つの？ほとんど役に立たない”など。
- スバルビィ諺辞典には、同義で“Candil sin torcida, mujer sin guardia. 芯のないろうそくは、守られていない女”（芯のないろうそくが、何の役に立たないように、いつ危ない目に会うかもしれない女が、それから身を守る適切な手段や方法を持たぬことを言う—スバルビィ）が収載されている。注：“torcida—灯心、ろうそくの芯”
- “宝典”（コバルビアス）には、“Poco aprovecha candil sin mecha. 芯のないろうそくは、ほとんど役に立たない”（物事を行うためには、必要だと思われるあらゆる物を準備しなければならぬ。ついでだが、外科医が、傷口に当てるガーゼは、“灯心”を意味する“mecha”と呼ばれている—コバルビアス）が収載。
- 類義のことわざには“網無くて淵を覗くな”（網を持たずに淵の魚を覗いても魚は捕れるはずがない。物事を成功させるためには、前もっての十分な準備が必要であるというたとえ—故事ことわざ活用辞典），“網持たずの淵覗き”，“網を持たずに海を覗くな”などがある。

### 1384. Quémese la casa sin que se vea el humo.

煙りが立たないように 家を燃やせ

- 不幸な出来事とか不名誉な事件が起こった場合には、外に漏れ出て恥さらしになったり、或は、スキャンダルになるような事態を避けるために、当事者以外にはできるだ

け知られないようにすべきである。(パロス)

- スバルビィ諺辞典には、次の異表現と解釈が見られる；“*Quémese la casa y no salga humo. 煙りが外に出ないように、家を燃やせ*” 特に、奉公人などを叱る場合には、騒ぎ立てたりスキャンダルになるようなことは避けるべきである。これは、ナポレオンの次の警句と同義である；“*La ropa sucia debe lavarse en casa. 汚れ物は、家の中で洗わなければならぬ*” (筆者の諺辞典, 諺 783 を参照), また、同義でコレアス諺集には “*Llorar a boca cerrada y no dar cuenta a quien no se le da nada. 口を閉じて泣きなさい、何もくれない人に気づかれないように*” (同諺 783 を参照), “*Llorar a boca cerrada por no dar cuenta a no sabe nada. 何も知らない人に気づかれないように、口を閉じて泣く*” (同諺 783 を参照) などがある。いずれも身内の恥とか不幸は秘密にして世間に知られないように隠すべきであるというたとえ。こちらでは“口から出れば世間”とか“吐いた唾は呑めぬ”などと言って、そういう事態になることを戒めているのである。

### 1385. *Quiebra la sogá siempre por lo más delgado.*

縄は いつもいちばん細い所が 切れる

- 弱い者が損をする。いつもいちばん力のない不運な者が、悪人がしがしめた罪をかぶる羽目になる。(パロス)
- “宝典” (コバルビアス) には、次の異表現が収載されている, “*La sogá rompe por lo más delgado. 縄はいちばん細い所が切れる*”
- 日本の諺には、同義で次のようにいくつかある；“皿嘗めた猫が科を負う” (魚を盗んだ猫ではなく、後からきて皿を嘗めていた猫がひどい目にあうの意で、巨悪は暴かれずに、小物ばかりが罰を受けることのとえ—故事ことわざ活用辞典), “米食った犬が叩かれずに糠食った犬が叩かれる” (大きな悪事を働いた者は罰せられないで、それにかかわって小さな悪事を犯した者が罰せられることのとえ—同辞典), “網にかかるは雑魚ばかり” など。

**1386. Quien a buen árbol se arrima, buena sombra le cobija. (El que...)**

寄らば大樹の陰

- 勢力がある者の保護を受ければ、何かと有利である。(スバルビィ諺辞典) 筆者の諺辞典、諺 462 は、異表現の“El que a buen árbol se arrima, buena sombra le cobija. 同訳”の方が表記されている。
- 同義では、“Llégate a los buenos, y serás uno de ellos. 有力な者に身を寄せなさい、そうすればそのうちにその一人になれるだろうから (寄らば大樹の陰)” (筆者の諺辞典、諺 779 を参照)
- 標題の諺は、日本のそれとたとえと意味がぴったりと一致した珍しい例である。日本のほうには、次のようにいろいろなバリエーションがある；“寄らば大木の下”，“寄らば大樹”，“立ち寄らば大木の陰”など、他者の力を頼りとする時は、有力な者を頼れというたとえ。いつの時代にも、どんな場所にも通用する警句があるが、“岩波ことわざ辞典”によると、異表現の“立ち寄らば大木の陰”が古くからあり、単に日差しを避け、雨宿りに使うには葉の生い茂った大木の下がよいという意味に使われていたが、強大なものに追隨して保身をはかる事大主義をたとえるようになったのは、第二次大戦後になってからのようである。

**1387. Quien acecha por agujero, ve su duelo.**

穴から見張っている者は 己の苦痛を見る

- 立ち聞きしたり、いつも人の動向を探っている者は、自分の悪口を言われているのが聞こえてひどく傷つき、苦しむ羽目になるということ。
- 同義には“El que escucha, su mal oye. 耳をそばだてる者は、自分の悪口が聞こえる” (筆者の諺辞典、諺 475 を参照) がある。
- 日本のことわざは、スペインのそれが言っているような輩がそこらへんにうようよいるので、用心しなさいとたとえて次のように言う；“壁に耳あり障子に目あり”，“壁に耳垣に目口”，“昼には目あり夜には耳あり”，“闇夜に目あり”，“石に耳あり”，“天に口あり地に耳あり”などが、指摘しているように、石から天、地、壁、垣、闇夜にまで、あらゆる場所、あらゆる時間に誰かの目が光り、耳がそばだてられている。そ



れほど、世間の目は、他人に対して好奇心に満ち何一つ見逃さないであろう。故に、これら一連の日本のことわざは、話す時は、注意して話せとおしえている。特に、密談の場合には。

**1388. Quien a mano ajena espera, mal yanta y peor cena.**

他人の手を当てにする者は 不味い昼飯と ひどい夕食

- あらゆることで他人を当てにする者は、良い人生を生きることが出来ない。(パロス) 自分の事業や利益を他者に任せる者は、たいていの場合、満足のいく成果を得ることはできない。(スバルビィ)
- 自分の健康に気を配り、体に合ったものを食べるためには、自分で食材を選び、料理をするのが一番であるが、それを長期間人任せにしていると、体を壊してしまうように、事業であれ、その他のことであれ、自分が努力して働くかわりに、いつでも人の助けを当てにする者は、やがて惨めな結末を迎えることになるだろう。

**1389. Quien baila, de boda en boda se anda.**

踊りの上手な者は どんな結婚式にも 招かれる

- 才能がある者は、常にその才能を必要とする人たちから求められる。(パロス)
- スバルビィ諺辞典には、異表現で “Quien bien baila, de boda en boda se anda. 同訳” (何か特別な才能があったり、愛嬌がある者は、あらゆる人に認められ、どんな所でも受け入れられる—スバルビィ) が収載されている。
- “宝典” (コバルビアス) によると; “andarse de boda en boda 結婚式場をめぐる”, とは “irse de fiesta en fiesta パーティ会場をめぐる”, “irse de un combite (convite—筆者) a otro 招待会場をめぐる” こと。そこから、結婚式場であれ、パーティ会場であれ、或は、個人の家であれ、どこでも人々が賑やかに楽しむためには、標題のことわざが言うように、常に何か特技がある者か、それとも豊富な話題でその場を盛り上げるのできる才気煥発な者が求められるのである。

**1390. Quien bien quiere a Beltrán, bien quiere a su can.**

ベルトランを大好きな者は 彼の犬まで大好き

- 人を愛すると、その人にかかわりのある全てのことが好ましくなるということ。(パ

ロス) ある人を本当に好きになると、その人の欠点までがよく見える、つまり、あばたもえくぼに見えるということ。(筆者)

- スバルビィ諺辞典には、異表現で “Quien bien quiere a Beltrán, a su perro le echa pan. ベルトランが好きなのは、彼の犬にパンを投げる” (人を好きになると、その人が持っているあらゆる物が意味を持ち、愛着の対象となる—スバルビィ) が、また、“宝典” (コバルビアス) には、“Quien bien quiere a Beltrán, bien quiere su can. ベルトランを大好きなのは、彼の犬まで大好き” (人を愛すると、その人にかかわりがある全てのものが愛しく思える—コバルビアス) が、それぞれ収載されている。
- 同義の諺には、“El que quiere a la col, quiere a las hojas de alrededor. キャベツが好きなのは、まわりの葉っぱまで好き” (筆者の諺辞典、諺 501 を参照) がある。
- 日本のことわざ “坊主憎けりゃ袈裟まで憎い” と同じで、誰でも人を愛したり、憎んだりすると、その人にかかわりがあるもの全てが、愛情の対象になったり、憎しみの対象になったりするるのである。そういう人間心理はどこでも共通しているらしく、中国に出典があるといわれている “屋烏の愛” (人を愛すると、その人の家の屋根にいるカラスまで好きになる) もそうで、標題のことわざとぴったり同じ意である。
- また、“愛” についてこういう諺もある：“Quien bien quiere, bien obedece. 愛する者は、愛する人に従う” (好きな人を満足させようといつも思っているから—パロス), “Quien bien quiere, tarde olvida. 好きになると、なかなか忘れられない” (過去の思い出は、楽しいものであれば、いつまでも忘れることができない—スバルビィ、また、この諺の真意は、パロスによると、“Donde hubo fuego siempre queda ceniza. 火が燃えた後には、常に灰が残る” と同じである。これについては、筆者の諺辞典、諺 441 を参照にして下さい。), “Quien bien te quiera te hará llorar. あなたを好きな人が、あなたを泣かせる” (多くの場合、愛するが故に相手に対する欲求が激しくなって、相手に苦痛を与えるまでになるのである—パロス) など。
- 例題：セレスティーナ第 17 幕、パルメノを愛している女が、標題のことわざを少し変えて自分の心の内を吐露している、“...ya sabes cuánto quise a Pármeno, y como dicen:<quien bien quiere a Beltrán a todas sus cosas ama>. Todos sus amigos me agradaban; ... .. あたいはねえ、パルメノがどんなに好きだったか、もうあんた知っているわね。世間で言うように、ベルトランを愛する者は、彼のものはなんでも好きだ、つまりあばたも笑くぼなのよ。あたいはあの男の友だちがみんな

好きだったわ。”(魔女セレスティナ, 大島正訳)

**1391. Quien bien tiene y mal escoge, del mal que le venga no se enoje.**

運がよいのに 悪運をえらぶ者は ふりかかる災難に 腹を立てるな

- 不確かなもののために確実なものを, 或は, 不健全なもののために健全なものを捨てさる者をいう。(パロス)
- スバルビィ諺辞典には異表現で“Quien bien tiene y mal escoge, no se enoje. 善をもちながら, 悪をえらぶ者は, 腹を立てるな”(疑わしいもののために, 確実なもの捨てさる者は, 後で災難を嘆くべきではない。また, 運を試す機会をみすみす見過ごす者は, 後で予見できなかったことに対して文句を言わずにあきらめなさい—スバルビィ)が収載されている。
- 例題: ドン・キホーテ第一部 31 章, ドン・キホーテと縁組みを望んでいる王女様よりドゥルシネア姫を選ぶというドン・キホーテに, サンチョはあきれかえり, 正気をなくしているおめえ様に, 今自分がする意見にくるいはないとまで言う, “...y que más vale pájaro en mano que buitre volando, porque quien bien tiene y mal escoge, por bien que se enoja no se venga. ...,<手にもつ小鳥は飛んでる秃鷹にまさる>だ。なぜってえと, 善をもちながら, 悪をえらべば, あとでいくらさわいでも, 取りけえしはつかねえだからね。”(正編二, 永田寛定訳)注: 諺の後半“por mal que le venga no se enoje ふりかかる悪に, 腹を立てるな”をサンチョは上記のようにわざと言い変えている。ドン・キホーテ全編を通して, 度々本来のことわざをサンチョは, このように言いかけている。それは, サンチョが知っていてわざとしている場合もあるし, 無知からくる場合もある—筆者
- 上記の例題にでてくる他の諺“Más vale pájaro en mano que buitre volando. 手の中の一羽の鳥は, 飛んでいる秃鷹に勝る”は, 筆者の諺辞典, 諺 886 に詳しく解説されているので参照して下さい。たとえどんなに少なくとも, 所有しているもののほうが, どんな約束事よりも確実であるということをととえている。
- 類義のこちらの諺には“選んで粕を掴む”, “選れば選り屑”などがある。

**1392. Quien bueyes ha perdido, cencerros se le antojan.**

牛をなくした者は 牛につけていた鈴を 思い出す

- あるものを欲しいと思っていたり、怖れていたりとすると、それにかかわるどんなことでも頭に浮んでくる。(バロス)
- スバルビィ諺辞典には“Quien bueyes ha perdido, cencerros se le antojan, o Quien bueyes ha perdido, los cencerros trae al oído. 牛をなくした者は、牛につけていた鈴を思い出す、或は、牛をなくした者は、鈴の音が耳に響く”(ある考えにとり憑かれている者は、どんな所でも、どんな時にもその考えていることにまつわることが話題になっていると信じてしまう—スバルビィ)が、収載されている。
- 日頃見過ごしている事が、ある時から自分の関心事になると、新聞なり、テレビなり、どこでもやたらに目につくようになることは、われわれにも起こることである。標題のことわざは、関心をもっている事柄を思いださせるものなら何でもすぐに頭に浮んでくるとたとえて言っている。

**1393. Quien calladamente arde, más se quema.**

黙って 身を焦がす者は よく焼ける

- 他者と分かち合うことで、悲しみは和らぎ、喜びはより一層のよろこびとなる。(バロス)
- 本来はそうなるべきであるが、現実には厳しく、人が苦しい境遇に陥ると、今まで交遊のあった人までが離れていってしまい、一人ぼっちになってしまうということは世間ではよくあることである。結局、頼れるのは自分自身であると教えているのが、“悲しい時は身一つ”、“苦しい時は身一つ”、“悲しい時は身一心”などである。